
会員の皆様

ニュースレター（電子版）特別号をお届けします。昨年7月に逝去された故天野之弥会員の追悼文を所縁の深い会員よりご寄稿いただきました。（編集委員会）

目 次

天野之弥氏を偲ぶ	鈴木 達治郎
天野軍科審の思い出	秋山 信将
天野大使との思い出	浅田 正彦
故天野之弥 IAEA 事務局長を偲ぶ	阿部 信泰
天野氏のイラン核問題への貢献 ―追悼文にかえて―	菊地 昌廣
天野事務局長を悼む	北野 充
天野之弥さんを追悼する	黒澤 満
天野之弥氏へ、感謝の思いを込めて。	土岐 雅子
天野事務局長一心優しき仕事人	中根 猛

天野之弥氏を偲ぶ

長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) 副センター長 (日本軍縮学会会長)
鈴木 達治郎

国際原子力機関 (IAEA) の事務局長として、核不拡散および原子力の平和利用両面で、日本人の枠を超えて活躍されてきた天野大使が、昨年 7 月に急逝された。とても信じられない悲報に愕然とした。天野大使の残した業績とその遺志を今後、私たちが引き継いでいかなければいけないと、心引き締まる思いである。

天野大使と初めてお会いしたのは、確か 2000 年代はじめのカーネギー平和財団の核不拡散会議であったと記憶している。まだ日本人の参加も少なかったころで、特に政府関連の方は貴重で、当時はハーバード大学の研究員という立場であったからか、海外の専門家と堂々とかつ率直に話し合っておられるのをよく覚えている。日本の六ヶ所再処理工場が話題になりかかっていたころで、核燃料サイクル政策やプルトニウム余剰問題についても、厳しい批判に対し、冷静に対応されていたことが印象的であった。

次にお会いした時には、もう IAEA の事務局長になられてからであった。正直、日本の外交官が IAEA 事務局長という要職に耐えられるか、多少の不安があった。しかし、就任まもなくして、“Atoms for Peace”から“Atoms for Peace and Development”と看板を新たにして、放射線治療や品種改良など、途上国の食糧・貧困・健康問題に取り組まれたのは見事だった。

最も苦勞されたのは、イランの核問題ではなかっただろうか。「米国寄り」にならないか、との懸念を一部の専門家から聞いたことがあったが、全くの杞憂であった。政治色を徹底して排除し、独立した検証機関としての実績を積んで、IAEA 保障措置の信頼度を高めた業績は、ノーベル平和賞を受賞した時期よりもむしろ高かったのではないだろうか。当時東京に来られて、スピーチのはじめに、「IAEA は日本語では『番人』と人間扱いだが、英語では『番犬 (watchdog)』と犬扱いです」とジョークを飛ばされていたのが印象的だった。

そして、個人的には、日本の原子力政策に対する対応にも敬意を表しておきたい。福島事故直後に日本政府に毅然として直言された対応、そしてプルトニウム問題では、プライベートな場面で幾度も貴重なアドバイスをいただいた。改めて深くお礼を申し上げたい。

最後にお会いしたのは、ナガサキ・ユース代表団を連れて IAEA で表敬訪問した時であった。お忙しい中、30 分のお時間をいただいたことだけでも有難いことであったが、なんと 1 時間も学生と語り合っていた。学生にとっても最も貴重な体験であったに違いない。

最後まで「平和と開発のための原子力」の激務に尽くされた天野大使。天国ではもう『番犬』のことは気になさらずに、どうぞやすらかにやすみください。

天野軍科審の思い出

一橋大学教授 秋山 信将

「天野軍科審。」

ある世代の軍縮・不拡散研究者にとっては、懐かしく響く、国際原子力機関（IAEA）前事務局長・故天野之弥さんの呼び名だ。

軍縮・不拡散研究の聖地ともいえる、カリフォルニアのモントレイ不拡散研究所で2002年の春学期を過ごして本省に戻った天野さんは、軍備管理科学審議官（軍科審）として日本の軍備管理・軍縮、不拡散政策を仕切る立場に立った。天野軍科審は、今でも実施されている政策の枠組みを次々と打ち出したアイディアマンだった。例えば「アジア不拡散協議（ASTOP）」。アジアの不拡散・輸出管理担当のハイレベルの実務者の間で政策協議・意見交換を実施するために日本が主催している会議だが、これも天野軍科審の時代に立ち上がった。天野軍科審はこの名前を気に入っていたらしく、「アジア（A）で、拡散をストップ（STOP）するって、いい名前でしょう」と自慢げにお話をされていたのをよく覚えている。

今でこそ「軍縮および不拡散政策は日本の安全保障政策の一部である」というのはよく言われているが、そのような問題意識を、実際に政策を実施する中で従来以上に強く意識し、日本外交における軍縮・不拡散政策の位置づけを高めたのは天野軍科審ではなかったか。軍科審が軍科部長へと格上げになったのは天野さんの時代だ。

当時のブッシュ（Jr.）政権が、天野軍科審のカウンターパートだったボルトン国務次官の下で北朝鮮問題をはじめ不拡散政策志向を強く打ち出し、多国間の枠組みをあまり重視しない中で、日米同盟の文脈において軍縮・不拡散政策をうまくハンドリングしていくのは非常に難しかったのではないかと思うが、日米軍備管理・軍縮・不拡散協議を積極的に活用して（半年に1度の頻度で開催）、両者の意思疎通を円滑にし、協調できる面は強調し、同時に「agree to disagree」についても毅然と対処したと思う。このような毅然とした姿勢は、2015年の包括的共同作業計画（JCPOA）をめぐる交渉、そして履行のプロセスにおいて、IAEA事務局長としてアメリカ政府に示した態度にも通じるところがある。他方で、天野事務局長は、「私はね、軍科審時代からボルトンは苦手じゃなかったですよ。皆さん彼のことを怖がりますけどね、理詰めで話すと、意外と分かり合えるものなんですよ」と言っていた。意見の違う相手ともとことん話し合うことで相手の信頼を得る努力をしていたといえる。

この日米軍備管理・軍縮・不拡散協議絡みでは、研究コミュニティの関与を積極的に進めてくれたのも天野軍科審だ。彼は、このトラック1の協議と並行してトラック2の会合を立ち上げてくれた（残念ながらこの枠組みは資金が続かずに途絶えてしまったが）。もちろん、それまでも日米の研究者コミュニティが政策論をかわす機会はあった。しかし、日

本の軍縮・不拡散研究のコミュニティをトラック 1 の対話により近い場所で政策の世界に本格的に誘ってくれたことは忘れてはなるまい。当時まだ研究者として駆け出しだった私を一人前に扱ってくれ、その後も折に触れて声をかけ、叱咤激励してくれたことは研究者として成長していく上で大変に励みになった。

「政策を実現していくためにはね、外務省だけじゃダメなんですよ。秋山さんみたいな研究者にもリアルな政策の現場に触れてもらって、もっとすそ野を広げてもらわないと日本の軍縮・不拡散政策は強くなりません。」のちに国連軍縮・不拡散教育政府専門家グループ会合の委員を務め、軍縮・不拡散教育にも力を入れていた天野軍科審が、当時言っていたことだ。

いつかまたお会いした時、「よくやっていただきました」と褒めてもらえるように、私ももっと頑張ろうと思う。

天野大使との思い出

京都大学教授 浅田 正彦

天野之弥大使に初めてお会いしたのは30年も前のことである。1989年、当時まだ静岡県立大学におられた中西輝政教授に誘われて、日本国際問題研究所の研究会に参加することになった。外務省から出向して研究所の研究調整部長をされていた天野大使も参加されていた。個人的にお話をする機会はなかったが、なんと博識な人だろうと思った記憶が残っている。

その後私は、1991年～1993年に外務省の専門調査員としてジュネーブの軍縮会議日本政府代表部（軍縮代表部）に勤務する機会を与えられた。その時期、天野大使は本省で科学課長や科学原子力課長を歴任されていたが、私の軍縮代表部での担当が化学兵器禁止条約（CWC）交渉であったことから、特段の接点はなかった。

再び天野大使にお目にかかったのは、1995年4月～5月の核兵器不拡散条約（NPT）延長会議においてである。この会議は、国際法を専攻する者としては是非とも参加したいとの衝動に駆られるものであり、軍縮代表部でお世話になった田中義具大使にお願いして参加させてもらった。その日本代表団に、軍縮代表部の参事官となっておられた天野大使も加わっておられた。この会議では基本的に公開の会合しか参加できなかったが、一度だけ天野大使に呼ばれてブリーフィングを受けたことがある。その時の印象もまさに慧眼という言葉そのものであった。

その年の11月から頻りに天野大使にお会いするようになった。生物兵器禁止条約（BWC）の検証議定書交渉に日本から毎年3～4回（各2～3週間）ジュネーブに出張することになったからである。BC兵器と呼ばれることがあるように、化学兵器と生物兵器はよくまとめて扱われるが、私がCWC交渉に参加していたので、「化学も生物も一緒だろう」と私をBWC検証議定書交渉に派遣することを提案したのは天野大使であったと側聞したことがある。軍縮代表部では日本提案を事前に検討すべく、何度も参事官室を訪ねた。あるとき日本提案の原案を持参した私に、「浅田さんと一緒に仕事をすると楽しいですね」と言われたのを覚えている。また、包括的核実験禁止条約（CTBT）が採択されてほどない時期に、CTBTO準備委員会設立文書の法的性格について意見を求められ、突っ込んだ話をしたのもこの頃である。

BWC検証議定書交渉は、アメリカの政権交代を受けたブッシュ新大統領の政策レビューの結果、2001年の夏に終焉を迎えることになるが、天野大使との関係はその後も途切れることはなかった。大使はマルセイユ総領事の後、本省の軍備管理・科学担当審議官になられ、再び軍縮の道に戻られた。大使はある時、「自分は軍縮の道を歩むことに決めている。キャリア外交官がみな次官になるわけではないから、むしろ外交においては専門家が重要だ」と言われていた。その言葉通り、その後アメリカ在勤中にハーバード大学とモントレ

一国際大学院大学で軍縮・不拡散を研究されたのち、本省で軍備管理・科学審議官、軍縮不拡散・科学部長の要職を歴任され、2005年にウィーン国際機関代表部大使に転出された。この間、本省では天野大使主催の勉強会が何度も開かれ、そこで行った軍縮・不拡散についての密度の濃い議論が懐しく思い出される。

ウィーン代表部大使時代の2007年4月～5月、国際原子力機関（IAEA）発足50周年ということもあり、NPT再検討会議の準備委員会がウィーンで開催された。大使は全体の議長として最終文書の取りまとめに尽力された。私も日本政府代表団の一員として参加していたので、大使の見事な采配を（IAEA事務局長選擁立に繋がればと祈念しながら）「日本外交の面目躍如」というタイトルで『外交フォーラム』の2007年8月号に寄稿させて頂いた。

2009年にIAEAの事務局長に就任されてからもNPT関連でお会いする機会は少なくなかったが、京都でも何度かお会いした。尾身幸次・科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム（STSフォーラム）理事長主催の科学技術に関する会議が毎年京都で開かれており、大使もIAEAから参加されていた。それに合わせて毎年のように補佐官を通じて懇談のお誘いを頂いたが、前年はどうしても日程が合わず、2011年10月になって漸くそれが実現した。名古屋大学での集中講義から帰ったその足で大使の滞在先であった宝ヶ池のプリンスホテル京都に向かい、二人で祇園の居酒屋「やすかわ」に行った。楽しく歓談したことが昨日のこのように思い出される（写真）。



その時の印象が良かったのか、2013年10月にも天野大使のほか、外務省で同期の高橋

文明元スペイン大使、同じく同期の石栗勉元国連アジア太平洋平和軍縮センター所長と 4 人で京都駅近くの居酒屋「京すいしん」で懇親の会をもった。外務省同期 3 人の中に若い私がなぜ入ることになったのかは不明であるが、そうした仲間内の集まりに加えて頂いたのは誠に光栄であった。

2017 年 3 月、以前から一度参加してみたいと思っていたカーネギー国際平和財団の国際核政策会議に出席した。その一つのセッションで天野大使がパネリストで登壇されることになっていた。そこで最前列中央に陣取って「齧り付き」で議論を聞いた。セッションが終わると大使が私のところへ来られ、「一度京大で講演ができませんか」と突然言われた。あるいはパネル・ディスカッションの途中で私を見つけて思いつかれたのかもしれない。その年の 10 月 2 日、『『平和と開発のための原子力』と IAEA の役割』と題する講演をして頂き、その後に大学院生とパネル・ディスカッションを行ったが、大変好評であった。その夜に祇園の居酒屋（「らんぶる」）で杯を傾けたのはいうまでもない。

こうして思い返してみると、天野大使には私の人生の節目節目で大変お世話になったことがわかる。天野大使はその真摯で誠実で社交的な性格から知己も友人も多いが、その一角に加えて頂いていたことに改めて感謝しつつ、この追悼文を終えたい。大使、どうか安らかに眠りください。

故天野之弥 IAEA 事務局長を偲ぶ

偲ぶ会代表世話人 元軍縮担当国連事務次長 阿部 信泰

天野之弥前 IAEA（国際原子力機関）事務局長は 2019 年 7 月に 72 歳の若さで亡くなりました。IAEA の事務局長としての任期半ばでの逝去でご本人もさぞかし残念だったろうと推察しますが、日本内外で活躍が期待されていただけに残念でなりません。日本人初のこの重要な国際機関のトップとして天野事務局長は IAEA のモットーを従来の「平和のための原子力」から「平和と開発のための原子力」へと改めて、原子力を従来のエネルギー（発電）利用だけでなく、農業・医療・工業への利用など広範な経済活動にも利用できる側面を強調、特に開発途上国支援に力を入れました。背景には当初、原子力のエネルギー（発電）利用を平和利用の主眼としてスタートした IAEA 内でもオーストリアなど原発に反対の声が強まってきて、原子力の推進についてはそれを希望する国に対して IAEA が支援するというような中立的な立場に変わってきたことがありました。加えて、大多数の IAEA 加盟国にとってはそれ以外の放射線の農業・医療・産業への応用という側面により関心が高まったということがあります。

2011 年の福島原発事故の後は事故直後の対応・除染・廃炉などへのアドバイスに IAEA の専門家チームを動員して事故への対応を支援しました。事故から間もない 2011 年 6 月に原子力安全に関する IAEA 閣僚会合を開催、これを踏まえて 9 月の IAEA 総会で原子力安全に関する IAEA 行動計画が確定されました。2012 年には、福島原発事故から得られた経験と教訓を各国と共有して国際的な原子力安全の強化に貢献するため原子力安全に関する福島閣僚会議を郡山で開催するなどして原子力安全強化に活発に動きまわりました。原子力安全の課題はいまだに未完の命題として残っています。

核不拡散の分野では、2015 年に、核兵器製造に向かっているとの疑惑が絶えなかったイランと主要国との間の核合意が達成される過程で、その実施を確実にする検証・査察プロセスを任されることになる IAEA の代表として合意実現に陰で尽力しました。極めて政治的な問題だけにイラン側・米側から批判されることも多く、困難な仕事でしたが、天野事務局長は IAEA の公平性を堅持しつつ、どうやって現実的にイランが核兵器開発に向かうのを止めるかという仕事に注意深く、慎重に取り組みました。

同時に、核兵器製造につながる可能性のあるウラン濃縮を各国が行わなくても済むようにとの目的で低濃縮ウラン・バンクの設立（於：カザフスタン）にも尽力しましたが、2019 年 10 月の正式発足を見ることなく、天野氏は他界しました。この関係もあつたのでしょう。天野氏はカザフスタンのナザルバエフ平和賞を受賞しましたが、これも残念なことに死後受賞となってしまいました。

病状が悪化した 6 月頃には IAEA 理事会に対し、任期満了を待たず 2020 年 3 月に職を辞するので後任選任を進めてほしいとの意思を表明する用意をしていたと言われ、本人は

その後、1か月足らずで世を去ることになるとは思ってもいなかったことでしょう。

天野氏はIAEA事務局長になる前は外務省で科学原子力課長・ジュネーブ軍縮代表部参事官・米国モントレール不拡散研究センターでの研修・軍縮不拡散科学部長・ウィーン駐在のIAEA担当大使などを歴任してIAEA事務局長になる十分な経験と知識を積み重ねていました。ここに至る彼の人生で最初の大きな試練は大学に進む前に母親を、そして大学在学中には父親を病気で失ったことでそうした試練を乗り越えて大学に進み外務省で仕事に取り組みました。この辺の苦労話がかまくら春秋社から出された対談録に語られており、これから出版される天野氏の回想録にも記されていることでしょう。

IAEA事務局長を選ぶ選挙戦は接戦を繰り返し、当選が確定するまでに立候補から1年を要する激しいものでした。悩むことも苛立つこともあったに違いありません。12月17日に開かれた偲ぶ会には安倍総理も駆けつけて挨拶をして下さいました。天野氏の果たしたことがいかに大きいか認められた感じです。総理もおっしゃっておられましたが、「最後の最後まで努力をしてこられた天野さんのご遺志を私どもは受け継いでいかなければなりません。」会に参加した天野事務局長の元側近によると、次に日本からIAEA事務局長が出るまでにはまた50年かかるかもしれないということです。それ以前にも次のIAEA事務局長に挑戦できるような次世代を養成する上で軍縮学会が果たすべき役割には少なからざるものがあると確信します。

偲ぶ会の模様は以下の写真集でご覧いただけます。

<https://photos.app.goo.gl/bC7XD9hZJPFZZkgA9>

安倍首相のビデオは一番下にあります。

天野氏のイラン核問題への貢献 ―追悼文にかえて―

核物質管理センター理事 菊地 昌廣

はじめに

天野氏と私の接点は、核兵器不拡散条約（NPT）準備会合への参加やジュネーブ軍縮会議への支援時に複数回あった。凜とした外交官としてのご活躍ぶりに感銘した記憶がある。国際原子力機関（IAEA）事務局長在任期間に原子力平和利用促進や医療への貢献など数多くのご活躍があったが、検証活動に携わる一人として、混迷を極めたイラン問題解決への事務局長としてのご努力と貢献には深く感銘している。追悼にかえてこの場でご活躍ぶりを紹介し、検証機関の指導者としての天野氏の原子力平和利用への貢献を日本軍縮学会会員の方々と共有したい。

事務局長就任以前の状況

IAEA はイランから申告された核物質が転用されていない状況は検証していたが、国内のすべての核物質が平和利用下に置かれていることを確認できる状況になかった。特に軍事目的開発の方向性の精査ができていなかった。追加議定書（AP）は署名済みであったが運用を拒否していた。

就任直後からの活動

2009年12月に就任後、時宜を得た状況報告を理事会等に提出することとして、対応を開始した。当時は強硬派政権であり、IAEAの検証には非協力的であった。このような中イランに必要な協力と行動を採るように繰り返し要請するとともに、EU3+3とイランとの核開発阻止を目的とした協議と連動してAP署名に関する国際法解釈の協議を続け、国際的信頼性を得られるような対応を採るように慫慂し続けた。ザリーフ外務大臣をはじめとしたイラン高官との協議のために多回数テヘランを訪問した。並行して、査察官や技術スタッフを指導して、イランが過去に行った軍事目的を志向した核開発活動の解明のために、IAEAが独自に入手した情報や関係国から提供を受けた情報などを示しつつ、関連する箇所への査察官の接近について交渉を重ねた。この間、理事会等に交渉経緯や進展状況を丁寧に報告している。

2013年8月に穏健派のローハニ政権が成立してから状況は変化した。新政権成立直後（2013年11月）にテヘランを訪問し、未解明事項の検証協力と対応についてサリーヒ原子力長官等と交渉し、新たな協力の枠組みを合意した（Framework for cooperation）。ローハニ大統領とも会談し、合意事項を再確認するとともに、未解明事項解明の重要性を繰り返し説得している。この状況は、EU3+3とも緊密に連携していた。もし、EU3+3とイランとの間で合意が成立した時には、この合意事項の監視や検証へ、IAEAは自発的に協

力すると表明し、その後 EU3+3 との協議を経て発生する必要経費の特別拠出をうけた。

この間も、理事会及び総会に対してたびたび交渉の進展を報告している。合わせて広報活動も積極的に行っている。2014年10月には米国の **Brooking Institute** で講演し、2014年11月には CNN のインタビューに答えている。米国では「イランに対する核検証への IAEA の挑戦」と題して、「政治的な活動を行うことも警察力を持つこともなく国連の機関として独立した技術的な検証機関としての IAEA の立場」を講演している。IAEA は、EU3+3/イラン合意による監視と検証と、NPT に基づく保障措置としての検証の二つの側面で貢献しているとした。2015年3月にはカーネギー財団で講演し、事務局長の職務を、政治性や感性を排除しフェアな立場で行っていると表明した。

包括的共同作業計画 (JCPOA) とその後の活動

2015年4月になって EU3+3 とイランが JCPOA についての協議を開始した。交渉開始時点から IAEA は、JCPOA に基づく検証機能を果たす用意があることを表明している。JCPOA には、AP の受諾が含まれており、7月の JCPOA 合意を受けて AP に基づく強化された監視と検証に切り替えるとともに、**Framework for cooperation** の一環として AP 実施を含むロードマップをサレーヒ原子力長官間で合意し、検証内容も進展させた。ロードマップで、未解明の軍事目的利用の可能性について、最終評価を 2015 年末までに完了することとした。直後の記者会見で、就任以来最優先事項として交渉してきた AP を受諾したイランの政治的決定を歓迎した。

この後の理事会報告で、2015年9月にテヘランでローハニ大統領と会談するとともに、問題の箇所を訪問し、査察官とともに必要な検証活動を行ったことを報告している。2015年11月の国連総会では、ロードマップで合意された検証活動が10月15日までに完了し、12月までに不明瞭事項を分析し、12月の理事会で最終報告すると表明している。

12月の理事会では過去の軍事目的核開発の実態を報告するとともに、長期にわたって解明に当たった査察官や技術スタッフに対してもねぎらいの言葉を述べている。この解明に向けての技術的追及は多くの知見と経験を IAEA にもたらした。2016年1月には JCPOA からの要請に基づく監視と検証活動が完了したことを理事会と国連安保理に報告している。

問題解明後の対応

2016年1月にテヘランを訪問し、サレーヒ原子力長官と会見して協力関係強化を合意している。その後も EU/米/イランの高官との会談や、テヘランでのローハニ大統領との会談でも JCPOA の約束履行を IAEA の検証により確認していると述べている。

その後の理事会や総会においても良好な検証結果を継続的に報告している。IAEA の成果は、2017年5月にデンマークからの招聘講演や、2017年11月のハーバード大学の講演でも公表している。

しかし、2018年5月に米国が一方的に JCPOA を離脱し、経済制裁を再開し、2019年5月にイランが、JCPOA の一部停止を表明した。2019年6月の理事会で、「イランの JCPOA

の一部停止に関し、イランの核開発への緊張感の増加が懸念されているが、IAEAによる検証は継続しており、このような緊張感が緩和されることを希望する」と述べている。これが、イラン問題についての最後のステートメントであった。

おわりに

国際機関のトップとして最後までフェアな方であった。約9年の在任期間、イラン問題解決に心血を注がれ、その結果国際社会に安定感をもたらしたが、米国のJCPOA離脱や経済制裁により、再度緊張状態が惹起され始めている。天野氏の貢献に敬意を表するとともに信頼に足る検証を維持継続することこそ遺志に叶うものであると深慮する。

天野事務局長を悼む

駐アイルランド大使 北野 充

昨年7月に天野事務局長が亡くなられたとの知らせを聞いたときの衝撃は今も忘れることができない。

天野事務局長とはご縁が深かった。国際原子力機関（IAEA）事務局長となられてからは、2012年から2014年まで外務本省の軍縮不拡散・科学部長として、2014年からご逝去の時までウィーン政府代表部大使としてご一緒に仕事をした。それより以前、私が科学原子力課長を務めた際には、直属の上司であった。ご縁の始めは、およそ40年前にさかのぼる。私が1980年に外務省に入省して最初に配属された国連局企画調整課で難民条約の加入の仕事をした際、天野氏が首席事務官を務めていたアジア局の難民問題対策室に書類の決裁のため「持ち回り」をするのが日課であった。

天野事務局長の業績については、多くが語られている。平和と開発のための原子力、北朝鮮核問題、イラン核問題、福島第一原子力発電所事故への対応。余人にはどうていまいが、ここでも一つ挙げるとすると、IAEA事務局長となることを構想し、それを実現したことである。

私は1998年から2000年にかけてIAEAを所管する科学原子力課長を務めたが、当時、日本からIAEA事務局長を出すことはどうてい困難と考えられていた。日本は、非核兵器国でありながら濃縮、再処理という原子力の最も機微な技術を取り扱うことを国際的に認められているというきわめて特殊な立場の国である。そのため、原子力の平和利用の検証を担うIAEAの厳重な監視の対象となる国である。当時、IAEAの保障措置予算の約3割は日本関係に当てられていたと記憶する。そうした国にIAEAの舵取りを任せるとは考えにくかった。1981年のIAEA事務局長選挙に今井隆吉氏を擁立したが、力及ばずであった。

その「どうてい困難」と思われていたことを実現したのが2009年IAEA事務局長選挙であった。長い時間軸でのゲームプラン、選挙戦における国を挙げての外交努力、候補者本人の奮闘によってそれが可能となったが、そもそも「IAEA事務局長となる」という天野氏の発想なくしては、そうしたあらゆる作業が始まらなかったであろう。日本が長年の間、不拡散分野で国際的に果たしてきた貢献への自信と、「自分ならばできる」という自負がそれを支えたものと思う。

「こうしたことを実現するためには、組織の取り組みとともに、個人の強い意志が必要なのです」

天野事務局長がそう語っていたことが思い起こされる。

天野氏がIAEA事務局長に就任して3年後の2012年に久しぶりにお目にかかった。私が、軍縮・不拡散科学部長という本省の担当責任者に任じられ、いろいろと相談、協議を行う立場となったためであるが、以前とは印象が違うな、と感じた。一言でいうと、「外務官僚・天野之弥」から「国際的リーダー・天野之弥」になっていた。政治の指導の下に、組織としての決定を実行していくという官僚の発想ではなく、自分を選んでくれた選挙母体を考え、自分が全責任を負っている組織の生存と発展を考え、自分の地位と影響力を考える国際的リーダーの発想になっていた。

それが、国際選挙に勝って国際機関のトップの座に座るということの意味であろう。

さまざまなご労苦があったことは想像に難くない。選挙のことを考えれば、すべての国に対してよい顔をしたいが、そうしたことは不可能である。対立案件は日常茶飯事であるが、ある国が歓迎する決着は他の国からは反発される。いずれの国も自国出身者を事務局に出したい中、どの人事案件でも喜ぶのは一カ国であり、多数の国が不満を持つ。加盟国の権限と事務局の権限の線引きは常にデリケートな問題となる。

そうした中、各国からの支持を確保しつつ国際機関として筋を通し、また、業務分野全般でレベルの高いパフォーマンスを実現しつつ新聞のヘッドラインとなるような重要案件に適切に対応することは、大変なご苦労だったことと思う。

ウィーンで5年間、身近な立場でご一緒した中での印象を言うならば、天野事務局長は、その重圧を真正面から受け止め、時には、楽しみつつ業務に当たっておられたように思う。

「IAEA事務局長となる」ことを発想した天野氏にとって、それは本懐と受け止めておられたものと思う。

一方、いかに本懐であろうとも、そのご労苦のため、ご家族にとって、日本にとって、IAEAにとって、世界にとって、かけがえのない方を失ったのは痛恨事である。

今は、くれぐれもゆっくりとお休みください、と申し上げたい。

天野之弥さんを追悼する

大阪女学院大学教授 黒澤 満

天野さんと初めてお会いしたのは1990年ですので、30年にわたるお付き合いになります。核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議や国連軍縮会議でしばしばお会いし、軍備管理軍縮・科学部長の時には、多くの軍縮研究者を連れて部長室に伺い、外務省からの多くの人が参加し有意義な意見交換会を実施したりもしました。

彼とじっくり話したのは、1995年のNPT再検討・延長会議の際にニューヨークの国連本部でのことでした。無期限延長に関する議論がどのように進展しているのかなどの分析に関するものでした。会議が終了して、その後彼に会った時には、「この会議をはじめ、NPT再検討会議での日本のプレゼンスがほとんどないのではないか。主要委員会の議長のポストとか補助機関の議長のポストとかまったく取っていないし、作業文書も提出していないし」という私の見解を彼によく伝えました。

その時の彼の返答は、「黒澤さん、私は今後外務省の仕事においては『軍縮』に特化して、軍縮の専門家としてやっていきたい。ほかの部署にはなるべく行かないように努力します」というものでした。

その後、2010年NPT再検討会議の準備会合が2007年に開始されたのですが、その少し前に、天野さんから「西側グループでの議論の結果、私が西側を代表する者として選ばれました」という連絡が入り、彼自身も私との以前からの約束を果たしましたよという感じで、誇らしげに連絡をくれまして、私自身も大変喜んだことが思い出されます。

その第1回準備委員会が2007年にウィーンで開催され、天野さんはその議長として2週間の会合を取り仕切ったわけです。私もその会議にすべて参加しており、ときどき夕食をとりながらいろいろと話し合ったのですが、なにしろ悪名高いイランのソルターニエが会議の決裂を意図して、さまざまな難問を投げかけてくるわけです。会議の当初は果たしてこの会議はどうなるのかな、決裂して失敗に終わるのではないかという危惧が生じるような情勢でした。

天野さんは根気強くソルターニエを説得するとともに、天野さんの支持者を徐々に増やすことに成功し、会議は成功裏に終了したわけです。この難しい会議を彼の努力で非常にうまく成功させたことにより、外交官としての彼の手腕は一般に認められるようになったと私は感じています。その後、天野さんは国際原子力機関（IAEA）の事務局長に立候補し、事務局長に選ばれましたが、2007年の準備委員会を成功裏に導いたことがその理由の大きな要因になっているのではないかと私は感じています。

また研究者としての天野さんにも、いろいろお世話になりましたが、彼は2002年に採択された「軍縮・不拡散教育に関する国連事務総長報告書」を作成する委員会のメンバーとして重要な働きをしています。それで、私が編集している『軍縮問題入門（新版）』（2005

年)に、新たな章を設け、「第10章 軍縮・不拡散教育」の部分を執筆していただきました。

さらに私が大阪大学を退職するのを記念する論文集、浅田正彦・戸崎洋史編『核軍縮不拡散の法と政治』(2008年)にも「日本の軍縮・不拡散政策」を寄稿していただきました。

2010年のNPT再検討会議が国連本部で開催された時に、天野さんは初めてIAEA事務局長として、会議の初日の午前中に演説を行いました。この会議ではVIPの取り扱いで、私などが近寄ることも不可能な感じで、遠くから演説を聞くだけでした。しかし、その夕方、天野さんの関係者が私に近づいてきて、「天野さんが是非お会いしたいとのことですので、ホテルまで来ていただけませんか」と言われ、お会いすることができ、事務局長になられたことに改めて敬意を表するとともに、これまでの経緯もあり、私は是非「4期務めて下さい」と半分本気で半分冗談で言ったところ、彼は「2期で絶対に辞めます」と返答しました。

その際に、日本軍縮学会の設立の話をしめすと、大変喜んで、「是非会員になります」とおっしゃったので、「大歓迎です。年会費は3000円です」というと、「それでは3年分9000円と、1000円の寄付で1万円払います」とその場で1万円を受け取りました。その意味で重要な会員であったにもかかわらず、多忙のため年次大会などの参加が叶わなかったのは大変残念に思っています。

天野さんと最後にお会いしたのは、2017年のNPT準備委員会の時で、多忙な方だから私が遊び半分に事務局長室を訪問するのも迷惑だろうと思っていましたところ、会議のサイドイベントの最初に簡単なあいさつに来られた機会に、ご挨拶に伺うと、「是非、事務局長室まで一緒に来てください。少し時間がありますから」と30分位お話した時でした。

この時は身体的な変化はまったくなかったし、「3期は絶対しないとってたのに3期をしているので、是非4期を」といった話をして、またそのうちお会いしようと言ったのが、最後になりました。

ご冥福を祈ります。

天野之弥氏へ、感謝の思いを込めて。

モントレール不拡散研究センター 研究員／プロジェクトマネージャー 土岐 雅子

私が初めて天野氏にお会いしたのは、モントレールの大学院を卒業後、ワシントン DC で軍縮関係のフェローシップをしているときだった。その時天野氏は私が卒業したモントレール国際大学院の不拡散研究センター (CNS) の DC オフィスに客員研究員として在籍されていた。

米国に留学し、卒業後フェローシップをしながら米国での職を探すのは容易ではなく、種々思い悩んでいた時期でもあった。

DC の軍縮不拡散関連の研究機関がその頃合同で開催したワークショップで、参加者の中で日本人は私だけと想着いたら、もう一人日本人と思われる紳士的な男性がおられ、お互い目が合った時に会議室の隅っこに座っていた私に、軽く優しく会釈してくださったのを覚えている。その会合で、今は亡き、CNS の DC オフィスのラリー・シャイマン博士から、「天野大使」と紹介された後、素晴らしい示唆に富んだ発言をされたことを記憶している。

その後、DC に滞在中に就職の相談にも乗ってくださり、激励して下さったことに心から感謝している。縁あって卒業したモントレールの大学院の CNS に就職することができたことをご報告すると、大変喜んでくださった。

天野氏と CNS のウィリアム・ポッター所長は、2002 年に国連総会で採択された「軍縮及び不拡散教育に関する国連事務総長の報告書」の策定を通し、大変親しくなられた。お互い軍縮不拡散分野における、次世代を担う若き人材の育成に尽力していたことから、当然共感することも多く、その信頼関係、友情は深まっていった。そのおかげで、天野氏がモントレールで軍縮不拡散を学ぶ学生に講義するために来校されたこともあり、私自身も引き続き様々なことを学ばせていただいた。

実際、天野氏と直接お会いしてお話した機会は限られているが、一つ一つの出会いが本当に印象的だった。2011 年長野県松本市で開催された国連軍縮会議に参加した際、たまたまホテルのロビーでお一人で座っておられた天野氏と思いがけずお話する機会があり、その時私は、東日本大震災で大きな被害にあった陸前高田でのボランティアに参加した後に軍縮会議に参加したことなど伝えると、天野氏も軍縮会議に先立ち、福島を訪問されていたことを語られ、詳細には触れられなかったが、国際原子力機関 (IAEA) 事務局長としてのご苦勞を垣間見た思いがした。

一番忘れられないのは 2012 年核兵器不拡散条約 (NPT) 準備会議がウィーンで行われたとき、私の担当している高校生のための軍縮不拡散教育プロジェクト、クリティカル・イシューズ・フォーラムの国際会議を NPT のサイドイベントとして行ったとき、基調講演をしてくださったことだ。

IAEA 事務局長として、大変ご多忙な中にも関わらず、NPT 準備会議の初日に行ったそのイベントに参加され、形式にとらわれず参加したアメリカ、ロシアの高校生と対話形式で、ざっくばらんに話をしてくださった。普段はあまり語られない、ご自分の高校生時代のことも交えながら、心温まるお話をしてくださったことが忘れられない。事務局長として、どれほどご多忙であったか想像しかできないが、次世代を担う青少年のための軍縮不拡散教育の重要性を理解されている天野氏だからこそ参加してくださったと、深く感銘を受けた。

CNS では、モントレイ大学院で不拡散を学んだ卒業生、客員研究員として席を置いた方々、当研究センターのプロジェクト等に参加された方など、この分野でのネットワークの広がりから、親しみとユーモアを込めて、「モントレイ・マフィア」と呼んでいる。外交官、国際公務員として頂点を極められた天野氏に、失礼かと思いつつも、ポッター所長がお話の中で天野氏もモントレイ・マフィアの一人だ、と言うと、いつも微笑んでおられた。

天野氏をご逝去された後、天野氏の生前の献身に深い敬意を表し、志を受け継ぐためにも、私自身、勿論足元にも及ばないが、少しでも、軍縮不拡散に貢献できるよう、特に次世代への教育を通して微力ながらも前進していきたいと決意している。CNS としても、天野氏の名を冠した「天野之弥平和大使」として、クリティカル・イシューズ・フォーラムに参加する高校生を毎年 1 名任命していくことも決定させていただいた。

今でも天野氏が若い学生や生徒に向けていた優しいまなざしが本当に忘れられない。

天野之弥氏とモントレイの思い出のビデオは、こちらのリンクからご覧ください。

https://youtu.be/TRI_3Qho44

天野事務局長一心優しき仕事人

外務省科学技術協力担当大使 中根 猛

私と天野さんのお付き合いが深まったのは、1993年の外務省機構改革により現在の軍縮不拡散・科学部（軍科部）の前身組織が発足し、同組織内で天野さんが科学原子力課長、私が軍備管理軍縮課長に就任した時からでした。その後、私は軍科部審議官、同部長、在ウィーン国際機関日本政府代表部大使と、2年先輩の天野さんが務めたことのある同じポストを歴任することになりましたが、その都度天野さんからは、いつも懇切丁寧な引継ぎを受けました。天野さんは、専門的知見はもちろんのことですが、人と接するときの物腰の柔らかさ、温厚な人柄等見習うことの多い先輩でした。

一番の思い出はやはり国際原子力機関（IAEA）事務局長選挙です。2005年の夏に天野さんはウィーンに転出、私はその後任として軍科部長に就任しました。その時の最大の課題の一つは、2009年に任期を終了するエルバラダイ事務局長の後任に天野さんを当選させることでした。天野さんはウィーンに赴任する以前からすでに明確な戦略を描いていました。まず2005年の秋にIAEA理事会議長に、次いで、2007年のNPT運用検討会議第一回準備委員会議長に就任し、国際的知名度と存在感を高めたうえで、IAEA事務局長選挙に臨むというものでした。選挙戦が本格化してからは、事務局長選挙に投票権を有するIAEA理事国の本国を精力的に回り、各国首脳にも直接的な働きかけを行いました。こうした戦略が功を奏し、天野さんは選挙戦を通じて一貫して圧倒的な優位を保っていましたが、IAEA事務局長選挙は他の国際機関の長の選挙に比べ、きわめて厳しい選挙で、理事国35か国中3分の2以上の多数をとらなければなりません。2009年3月の選挙では何度か投票が繰り返されましたが、天野さんはわずかに当選のラインに届かず、投票は7月の第2ラウンドに持ち越されることになりました。さすがに気丈な天野さんもこの時ばかりは落胆されていましたが、わずか数時間後には第2ラウンドにも立候補するとの決意を明らかにしました。7月の選挙戦も厳しいものではありませんでしたが、日本政府の強い後押しもあり、ようやくぎりぎりのところで当選を果たすことができました。

2009年12月に事務局長に就任後、天野さんは、途上国向けの原子力平和利用プログラムの策定、東京電力福島原子力発電所事故への対応、イラン核合意、北朝鮮の核開発への取り組み等に多大な貢献を果たされました。他方でIAEA事務局内では一般職員に混じって大食堂で昼食をとるといった気さくな人柄で多くの人から慕われていました。そんな天野さんのあまりにも早いご逝去は残念でしかたありません。心よりご冥福をお祈りします。